あとがき

――本書の企画から発行まで

文集「濁流の子」がここに完成した。私が伊那谷災害の記録文集の製作を企画してから足かけ三年である。災害の復旧はほぼ終了した今日、この文集の発行が、どんな意義をもつのか、私にも疑問だ。

最初企画した時にはもっと簡単に仕上るものと思っていた。しかしこの仕事は非常に多くの困難をもっており、何度か製作を断念しようと思った。

しかし、製作に協力くださった多くの人たちの善意と期待は無駄にできない。どんなに発行がおくれてもよいから、とにかく完成だけはしようと思い、余暇を見い出しては製作に励んだ。

予定よりだいぶおくれてしまったが、ようやく発行できるようになった今、一種の開放感にしたっている。ただ完成したことが嬉しい。他のことは、これからゆっくり反省し、考えていきたい。そんな気持だ。

◇

三十六年十一月、伊那北高校二年だった私は、伊那谷被災地の高校受験生を励ます運動を提唱した。災害という悪条件を克服し、高校受験を目ざして頑張っている受験生を心から励ましそうと、友人等に呼びかけてこの運動を推進した。幸いにして、この運動の趣旨は多くの人に理解され、全国各地から六百人に及ぶ人々の善意が寄せられた。

高校入試の終った三十七年三月、災害の苦しみの中から立ち上り、見事に合格の喜びを得られた人たちの体験記をまとめ、暖かい励ましを送ってくださった全国の友に伝えようと考え、文集「濁流の中の高校受験生」の製作を企画した。早速被災地の中学校十校に協力を依頼、受験生の名簿を送っていただいた。そして二回にわたって百六十人に原稿を依頼、

文集製作の仕事はスタートをきった。

しかし「大学受験」という一大目標が、三年に進学した私を迎えた。そしてそれは文集製作の仕事の続行を不可能にした。何はさておき自分のことを考えなければならない時であった。こうして、六月頃までに寄せられた五十余編の体験記は机の中に眠ることになってしまった。

製作の仕事を再開したのは、私が大学生となった三十八年四月のことだった。前の計画を改め、災害から復興までの記録文集「濁流の子」の製作を企画した。そして綿密な計画のもとに製作にとりかかった。最初私はこの文集を年内に完成しようと計画し、それは容易なことだと思っていた。しかしいざ仕事を始めてみると前途多難であった。

被災地の小中学校九十校に原稿を依頼したのは五月一日のことだった。しかし何の反響もないまま一カ月半がすぎた。ちょうどその頃放送されたニッポン放送の「その後の伊那谷をゆく」を聞いて、私は文集製作の決意を新たにした。取材者の川内通康氏を訪ね、被災地の様子を聞いた時には、その感をいっそう深めた。

文集の原稿が何ら集まらぬまま夏休みを迎えた。再び原稿の依頼状を作り五十校に送付した結果、今度は協力を約す学校もあってきた。しかし実際に原稿が送られてくるまでには、まだ相当の時間が必要であった。

夏休みのあけた九月、期待していた原稿は意外に少なかった。製作を断念しようと思ったのもこの時であった。一人の力で文集を作ることの困難さを味わされた。何人かの友にそれとなく協力を求めた。しかし適当な人はいなかった。

文集の製作を続行するか否かをかけて、九月二十五日、今度は市町村役場に協力を求めた。反響は大きかった。災害当時、救助法の適用をうけた十六市町村全部から災害に関する資料が送られてきた。これに力をつけ、

十一月十日、十八日、十二月三日、八日と追いうちをかける様に、小中学校や教育委員会、あるいは個人的に原稿を依頼した。

原稿は三十九年一月まで連日の様に送られて来、約千編、四百字詰原稿用紙になおせば三千五百枚にもなったであろう。この原稿蒐集のためにおした郵便物は五百通にものぼり、こんな所にもその困難さがうかがえる。

このぼう大な原稿の中から、私が意図している作品を選び出すことは、大変な仕事だった。一編一編読んでみると、私が期待していたものは意外に少なかった。しかしもうこれ以上原稿の蒐集は困難であった。とにかく適当なものを選び出し、構成等についてはそのあとで考えることにした。原稿の選択に当っては、災害について広範囲に描ける様注意し、作品の良し悪しにはあまりこだわらなかった。苦労した原稿の選択や編集も六月十日に終了した。

編集が終るといよいよ製作である。当初は印刷所に依頼する計画だったが、なんといっても資金不足がたたり、自分の手で作り上げるより仕方なかった。ガリ版刷り、五百部の製作を決めた。

六月は原紙をきることに追われ、一日の生活がこの仕事を中心に動いている様に思われたほどである。仕事が進むにつれて腕や指の痛みを覚えた。しかし休むわけにもいかず、痛みをこらえて仕事を続けた。八十枚の原紙を二週間で書き上げた。

仕事は印刷へと進んだ。しかしここで思いがけぬことが待っていた。七月に入ると早々暑い日が続き、印刷のペースがガタンと落ちた。そして連日の無理が重なり、"夏バテ"で病に伏す結果となった。仕事は中断、発行のメドは全くつかなくなってしまった。

再び仕事を始めたのは学校の試験が終ってからの十月八日だった。毎日少しずつ仕事を進め、こうしてようやく発行へとこぎつけたのである。

この文集が完全なものでないことを私も認める。しかしこれ以上のものは、私の力ではできないと思う。とぼしい資金と、限られた時間の中で、私は精一杯にこの文集を製作した。この文集が私の企画意図を満しているかどうかも疑問だ。しかし読者はこの文集から"何か"を吸収してくれることと思う。そういう意味で、読者の率直な感想、批判をお聞かせいただければこの上ない喜びである。

最後に、この文集の製作に当り、絶大なご支援ご協力をおよせくださった多くの方々に厚くお礼申し上げます。

三十九年十二月五日

碓田栄一